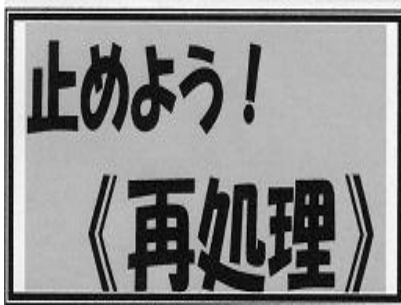


三陸の海を放射能から守る  
岩手の会 (略称) 三陸の海・岩手の会  
郵便振替 02240-5-102650  
ホームページ [再処理/岩手の環境](http://www.coocan.jp)  
[/RI 廃棄物 \(coocan.jp\)](http://www.coocan.jp)  
《本紙の全バックナンバー掲載》



## 《天恵の海》

2024(令和 6年)

5月27日

第257号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

# 高レベル廃液事故は「蒸発乾固で止まる」

## という原子力規制委員長の答弁

衆議院原子力問題調査特別委員会

山崎誠議員の質疑

山中伸介  
原子力規制委員長



山崎誠議員

四月一八日開催された衆議院原子力問題調査特別委員会で山崎議員(立憲)が、再処理工場で起こりうる高レベル放射性廃液の重大事故について質問を行いました。この問題についてこれまで、川田龍平議員、福島みずほ議員から質問主意書が提出され政府答弁がありました。国会での対面の質疑がなされたのは、今回の山崎議員が初めてといえます。山崎議員の、資料に基づいた真直な質問に対して、山中伸介原子力規制委員長の答弁は、質問に答えず、はぐらかす内容であり、山崎議員の「質問に答えていない、理事会で協議の上然るべき見解を委員会に報告してほしい」という要請に、平野明委員長は「後刻、理事会にて協議する」とし、継続審議となりました。

# 「蒸発乾固以降に起こる事象」 についてなぜ回答がないのか!

IAEAは廃液貯槽の破裂を定義している  
私が、再処理は撤退した方がよいと思うのは、事故のリスクです。規制委員会は、停電などで冷却が喪失し高レベル廃液の温度が上昇して行っても「蒸発乾固で止まる」とし、その後の溶解や揮発、爆発などの科学的評価を行っていない。これでは危険な事象を見落としてしまう。IAEAの定義でも「貯槽の破裂」を記している。

### 再処理工場は高温高圧にならない施設

再処理工場は原発のように、高温高圧になる施設ではありません。重大事故として臨界事故、蒸発乾固、水素爆発などが想定される。複数同時に発生する可能性があるが、事故対応に時間的余裕がある。大容量電源への依存度も低い。可搬型設備で対応出来る。放出放射能も数テラベクレル程度である。

山崎誠議員は「何故、審査は蒸発乾固までしか、想定していないのか?」と質しましたが、山中規制委員長は、「再処理工場は原発と違って高温高圧にならない施設だ。事故も急速には進まない」と答弁しました。これでは、安全のために原子力規制をする日本の最高責任者として、質問に向き合えないはぐらかしの議論で、看過できない無責任な答弁です。

### 高レベル放射性廃液の事故の事象

高レベル廃液は、冷却していれば高温高圧にならないかもしれませんが、電源が途絶えると反対に崩壊熱で高温になり沸騰を始めます。蒸発乾固後、硝酸塩と有機物等による爆発の危険が増し、爆発しない場合には乾固物がさらに溶融し揮発し、放射能の大量放出が始まります。起きれば想像を絶する巨大事故になるとしてドイツは早々に撤退しました。

### ガラス固化の見直しなく、アクティクス試験を始めたのか?

二〇〇五年アクティクス試験が強行された時、発生する高レベル放射性廃液はガラス固化すると思いましたが、実際には技術が欠陥だらけで失敗。現在も失敗続きです。従って高レベル放射性廃液は危険な液体として工場内のタンクに貯まっています。地震による停電が心配されます。

衆議院ホームページでいつでも見られます。

国会中継 原子力問題調査特別委員会 (2024/04/18) ([youtube.com](https://www.youtube.com))

# 再処理工場の実態の公開を！



起きる可能性のある事故は 全て 対象とすべきだ！

福島みずほ議員 質問主意書

昨年12月の質問主意書への政府答弁書は、看過出来ない、規制委員会の責任を放棄する内容でした。

政府答弁書の矛盾する回答



写真1 高放射性廃液タンク 第2回ヒヤリング資料17頁

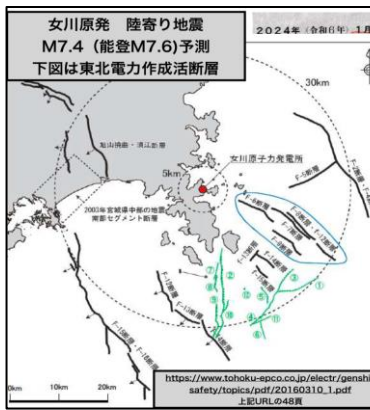
このような貯槽タンクに 東日本を壊滅させる程の、高レベル放射性廃液が貯まっています。

高レベル放射性廃液  
タンクで冷却し保存中。  
電源喪失で巨大事故の恐れあり

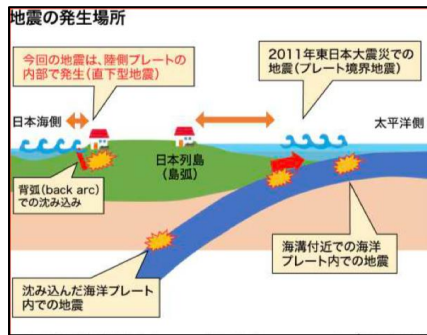
巨大事故を、  
起こさぬうちに引き返せ！

## 永田文夫講演報告 続き(第256号より)

# 女川原発は 3.11 大震災の被災原発



女川原発周辺の断層分布図 東北電力作成



海溝型プレート境界地震 nippon.com編集部

左の図は太平洋プレートが日本列島の下へ滑り込んで行くプレート型地震の説明図です。女川原発は日本海溝に近接した位置に建設されており、世界で最も地震や津波に襲われやすい原発と言われています。さらに牡鹿半島周辺の断層分布図を見ると直下型地震によって原発が大被害を受ける危険性が高いことがわかります。

世界中で、最も地震・津波が心配される女川原発

三・一一震災で、女川原発には波高約一三mの大津波が押し寄せ、わずか八〇cmの差で直撃を免れました。しかし流入した海水で、非常用ディーゼル発電機八台中二台が使用不能となり、高圧炉心冷却系が停止、地震の影響で送電線が被災、外部電源五系統中四系統が不通となり、四月には一号機の高圧電源盤でボヤが発生、二年後 I N E S レベル2とされ、紙一重で大事故を免れました。この後も地震に見舞われ二号機原子炉建屋の剛性が三割に低下など劣化が目立っています。しかし東北電力は本年九月に二号機を再稼働させるとし、突き進んでいます。

注：INES(国際原子力放射線事

象評価尺度) 原子力災害について七段階に分けている国際評価レベル2は「異常事象」。福島原発事故はレベル7の「深刻な事故」。

講演会では、RMC(ラジオオメダイカルセンター)とILC(国際直線素粒子衝突加速器)の岩手への誘致の問題も取り上げられました。「最先端技術研究」の大宣伝のかけ声の裏、岩手に原発廃棄物を持ち込もうとする動きがあり、大いに警戒すべきとの訴えがありました。RMCについては市民運動の成果による、実質開店休業状態になっている現状があります。

国際リニアコライダー (ILC) 誘致の狙い

しかし特に十数年前からキャンペーンが始まったILCは警戒を要します。実際にその音頭を取っているのはビッグプロジェクトに群がる三菱重工等の企業群で、「最終処分場とILCをセットでどうか」や「高レベル廃棄物の短半減期化に加速器を利用する」などの発言があった事実があります。二〇年の操業後について、未だ施設がどうなるのかが明らかにされていません。当初三〇〜五〇kmの施設が、二〇kmに縮小されたことも奇妙です。高レベル放射性廃棄物の処分場建設は国策であり、以前から岩手が最適地とされており、警戒が必要です。